

2024 年度開催 第 12 回大谷大学文藝コンテスト

小説部門 総評

審査委員長 安藤 香苗

第 12 回「大谷大学文藝コンテスト」の「小説部門」においては、前回よりも多い 50 作の小説作品が寄せられた。単純に数が増えただけではなく、歴年に渡って審査に携わってきた審査員をも唸らせる多彩なジャンルやテーマの作品が集まり、参加者の意欲が感じられる回となった。その結果、受賞作品もそれぞれの個性の際立つ賑やかなラインナップになったのではないかな。広い意味での「恋愛」をテーマとした作品も例年になく目立ち、そのことから現代の高校生が新たな時代のあるべき人間関係のあり方を模索していることが感じられて興味深かった。

芸道の修行における過程を示したものとして「守破離」という考え方がある。「守」は型や技の基本を忠実に守り、確実に身につける段階。「破」は他の流派の教えにも目を向けて、心技を発展させる段階。「離」は独自の新しいものを創造し確立させる段階、とされている。この考え方から見ると、今回寄せられた投稿作品は主として「守」の段階にいた。受賞作は「守」の段階をひとまずクリアできていた点が評価され、逆に受賞に至らなかった作品は小説の基本とされる部分のいずれかに欠けが見られ、それが明暗を分けたとも言える。小説執筆の基本を身につけるには、まずは多くの小説を読んで知ることが必要となる。そして今回見事受賞に至った人たちも、次の段階として定型パターンを超える新たな創作を目指してほしい。

さて、審査段階で気になった点を具体的にいくつか挙げておきたい。まず、自分が作品の軸とすると決めたテーマやジャンルに対しては敬意を払ってほしい。敬意を払うとはどういうことか。それはつまり、テーマやジャンルを安易に利用しない、ということである。たとえば現実世界の物語としては辻褄を合わせることが難しいと作者が感じたために「なんでもあり」(のように思える)のファンタジーや SF の要素を使う、といった安易な世界観の操作は、物語が作者にとって都合が良いというだけの展開になってしまいがちだ。そのような逃げの姿勢は読者にも伝わってしまうもの。SF なら SF の、ファンタジーならファンタジーの、それぞれの設定を使う必然性を考えて

ほしい。幻想世界には幻想世界を描くための枠組みが必要なのだ。そうした枠組みの感覚を身につけるには、より多くの小説を読み、様々な描き方のパターンを知るしかない。

そして、小説の長さ（分量）とそこに描く内容のバランスにも気を配ろう。小説部門の規定量は原稿用紙 20 枚以内。小説としては短編の部類に入る。小説というものは物語（ストーリー）がわかるように書けばいいというものではない。それは物語の「あらすじ」であって、どんな名作でも「あらすじ」を読んだだけで小説本体を読んだのと同じ感動を読者に与えることはできない。今回の投稿作品の中にも、原稿用紙 20 枚で描くには無理がある内容を強引に詰め込んだ作品がいくつか見られ、大変残念に感じた。

また今回、筆力自体は認められるが残念ながら応募条件に反していると判断せざるを得ないため失格となった作品があった。近年は自分の作品を発表する手段もいろいろあり、高校生の皆さんのなかにも匿名でインターネット上の表現活動をしている人がいると思うが、自作を外部に応募する際には応募条件を明確にクリアできているかどうかしっかり確認していただきたい。

総じて、せっかく自らが生み出した作品を雑に処理せず、大切に丁寧に扱うことを心がけよう。